



情報とは何だろうか

独立行政法人メディア教育開発センター 堀田 龍也

情報とは何だろうか。この問いもまた難しい。

「いい情報があるんだよ」と言われたとき、私たちは何だかどきどきする。少し秘密めいた、大きな声では言えないような、そんな気になる。

1つ例を示そう。Aさんが「駅前にいいマンションができたんだって」と言ったとする。それを聞いたBさんは、偶然にもマンション購入を検討中だったから、すぐにより詳しいことをAさんに尋ねた。一方、同じことを聞いたCさんは、すでに家を購入したばかりだったから、今さら興味が持てなかった。さらに、たまたま同席したフランス人のDさんは、日本語がわからないため、Aさんの言葉は聞こえたけども、何の話だか理解ができなかった。

さて、Aさんの発した言葉は、情報だといえるのだろうか？

少なくともBさんには貴重な情報だったはずだ。しかしCさんにとってはさほど貴重な情報ではない。さらにDさんに至っては、言葉の意味すら解釈できず、無作為文字列の音データを受け取ったに過ぎない。

筆者は、データと情報をこう使い分けてみたい。Aさんが発したのはデータである。データが情報になるかどうかは、受け手で決まる。Bさんにとっては、Aさんが発したデータは貴重な情報であった。Cさんにとってはさほど貴重ではない情報であった。Dさんに

は処理不能なためデータのままであった。

こう考えると、情報の価値は受け手によって変化するということになる。受け手がこのことをしっかり意識していなければならないということだ。Aさんの発した言葉に仮に誤りがあったとした場合、Bさんは怒るかも知れないが、Cさんはさほどでもなく、Dさんにはほぼ関係ないということになるだろう。

筆者なりにデータと情報を使い分けてみた。しかしこうすると、「Aさんは情報源」という言い方をするけれども、情報になるかどうかはまだわからないのだから、情報源という言い方は変かも知れない。「コンピュータは情報を処理する機械だ」という言い方は「データを処理する」に変更しなければならない。このように言い換えても意味は通じるが、では「情報処理」という用語をどう捉えればいいのかという点でまだ疑問は残る。

私たちが日常的に使っている「情報」という用語は、真剣に考えると実に不思議な用語である。「情報」という用語が印象で使われている限り、「情報教育」という教育もまた、人によって解釈が異なり、揺れ動いてしまうのかも知れない。

ほりた たつや 文部科学省参与などを併任。政策立案から教育現場の実践指導まで、情報教育に関するあらゆる場面に精力的にかかわっている。